いろビジネス

日本茜を拡げる会

日本茜が生み出す ジャパン・レッドの復興を

栽培、染色から製品販売、顔料化にも成功

日本古来、染色に用いられてきた「日本茜」を復興させたい。染色工房「かさや儀平」（大阪府泉北郡忠岡町忠岡北2-1-14、TEL.0725-32-0162）代表の杉本一郎さんは、日本茜を普及する団体「日本茜を拡げる会」（https://japan-red.com/）を立ち上げ、茜の栽培から染色技術の開発、染色製品の販売に取り組んでいる。杉本さんの理念に共感した、新居紙器㈱常務取締役の新居慶二さんも活動に加わり、（一社）日本アカネ再生機構の設立に向けて、準備を進めている。杉本さんらは、企業の協力を得て、日本茜で染めた衣料品や服飾雑貨を試作。茜の顔料化にも成功し、口紅などの化粧品への応用を目指している。日本茜の復興には、農家の事業継続、地域活性化といった別の狙いも込められている。杉本さんと新居さんに活動の源泉と目指すビジョンについて聞いた。

（✎ 高橋綾子）

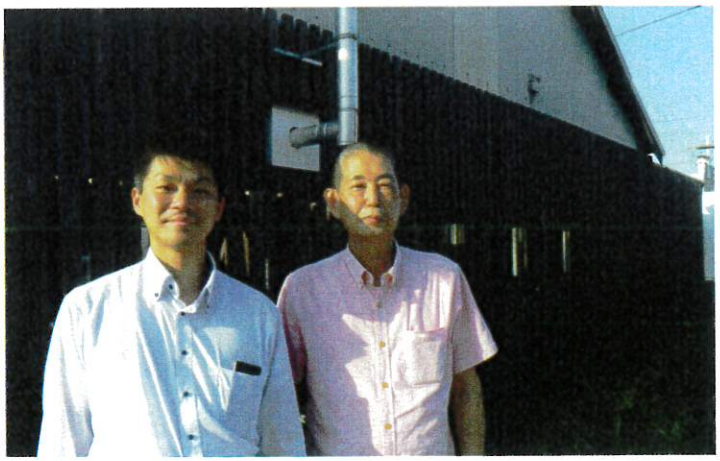
退職後、第2の人生を茜の復興に

日本茜を拡げる会のある忠岡町は、大阪でも泉州と呼ばれる地域で、大阪湾に面し、海を挟んだ先には関西空港がある。泉州は、古くから綿花の栽培とそれを用いた織物産業がさかんで、杉本さんの実家も織物製造を家業としていた。

杉本さんは、京都工芸繊維大学を卒業後、織物メーカーに入社したが、日本茜を知ったのは、この会社に勤務していた頃のこと。会社が、奈良の正倉院に納められている裂地（きれじ）（当時の染織品）を復元する事業を受け、それに携わった担当者から、「裂地の復元には昔の絹糸や植物染料が必要だが、赤色染料の日本茜が手に入らない」との話を聞いた。杉本さんは言う。

「日本茜は、奈良時代には律令制下の租税である租庸調の調（特産品など）として、国に納められ、天皇をはじめ貴族の衣服の染めに用いられていましたが、律令制の衰退とともに鎌倉時代には廃れたようです。また、幕末に使用された日本の旗（日の丸）の赤色は茜染だったと言われますが、明治になって海外から化学染料が入ってきて、また廃れてしまいます。こうして歴史を紐解くと、茜染は日本にとって重要な色であるのに、今現在、再現できないのは悲しいことだと思いましてね。同じ草木染の藍染が『ジャパン・ブルー』であるなら、茜染は『ジャパン・レッド』であり、何とか復興して、現代の人々でその良さを享受できないかと思いました」

57歳で織物メーカーを退職した杉本さんは、第2の人生を日本茜の復興にささげようと決め、茜を探して日本各地を巡った。



杉本一郎さん（右）と新居慶二さん

かさや儀平